

# 原子爆弾投下後の説明図版作成の試み

嘉陽礼文

## Attempts to Create Explanatory Illustrations of the Surroundings of Hiroshima University, After Hiroshima's Atomic Bombing

Rebun Kayo

**Abstract:** After the atomic bombing of Hiroshima by the United States on August 6, 1945, six international Southeast Asian students, and several Japanese, evacuated to Hiroshima University of Literature and Science, for approximately a week from August 7. The university was located approximately 1,420 meters from the hypocentre. In this paper, with the help of a Japanese national who aided in the evacuation, we have presented relevant events and their locations through explanatory illustrations. This illustration has brought new insights into the reality of international students, under the World War II.

**Key words:** atomic bombing, Southeast Asian international students, evacuation, explanatory illustration

**キーワード：**原爆投下、南方特別留学生、避難生活、説明図版

### 1. 前言

1945年8月6日の、広島への原爆投下後の8月7日から14日までの広島文理科大学構内（広島市、東千田町）における南方特別留学生の避難生活については、栗原明子氏の証言などにに基づき調査され、これまでに多くの書籍（江上1997）（栗原2013）、論文（川野・栗原・今中2013）、新聞記事（中國新聞2018年3月5日）、（中國新聞2018年4月16日）の他、多くの報道機関、研究者、個人等によって様々な媒体で発表されてきた。しかし被爆直後の同大学構内における様々な実際の行動を個別的に理解することはできても全体として捉えることは難しく、当時の状況がイメージしにくいという問題もある。そこで、こうした問題意識の中で、原爆投下後の様々な行動の位置関係を含めて理解しうる説明図版を作成し、後世に残そうという活動が行われている。本稿においても、同避難生活中において栗原明子氏が経験した各エピソードが行われた場所を把握できる説明図版の作成を行った。また説明図版のみでは避難生活およびそれに至る経緯を含めた時系列を理解することが困難であるため、本稿では栗原明子氏と南方特別留学生が同大学へ至るまでの被爆後の行動、および同大学で避難生活を共にした人物、ならびに同大学の被爆の状況を併せて調査した。これらの調査内容から同避難生活の全容について理解を深めることを本稿の目的としている<sup>1</sup>。

### 2. 避難生活に至る経緯

#### 2.1 栗原明子氏（被爆時には高橋明子氏） くりはらめいこ

1926年5月5日、広島市生れ、1945年8月6日（当時19歳）には広島女学院専門学校

保健科に在学しており、向洋にある東洋工業（現マツダ株式会社）にて学徒動員中に被爆した。原爆投下による大火災の炎が弱まってきた翌日の8月7日には、広島県立病院の眼科医として被爆時に同病院に勤務していた同氏の父親（高橋謙氏、8月6日に被爆死）<sup>2</sup>を捜索するために広島駅方面から徒歩で市内中心部へ向かった。始めに大手町小学校の救護所（小学校は全焼）に向かい、次に実家のあった大手町7丁目（全焼）を経て日赤病院の救護所を訪ねた。その後、夕刻になり日赤病院と広島文理科大学の間の市電通りに面した広島文理科大学（東千田町）の門付近を歩いていたところ、広島女学院専門学校の1学年先輩で、すでに広島文理科大学の構内で南方特別留学生と避難生活を始めていた佐々木千重子氏（後に中村千重子氏）と偶然に出会った。同氏の案内で広島文理科大学の構内へ入り、南方特別留学生6名ほか、日本人数名との避難生活へ合流した。その後、南方特別留学生が広島から京都を経て東京へ向かうために広島文理科大学から移動する8月14日まで、南方特別留学生らとの避難生活を共にした。栗原明子氏と同氏の母親（高橋兼子氏）は、8月16日まで広島市内で父親を捜索し、同日に同氏の妹の疎開先である安佐郡久地村へ向かうため広島文理科大学を後にした。被爆以前には、栗原明子氏は南方特別留学生との交流は無かったが、佐々木千重子氏は南方特別留学生との交流があった（2022年4月19日と2022年5月26日の栗原明子氏への筆者による聞き取り調査による）。

## 2.2 広島文理科大学南方特別留学生

南方特別留学生とは、1943年から1944年にかけて日本政府が東南アジアの諸地域から日本へ招聘した205名の留学生のことをさす（江上1997）。当時、日本が掲げた占領政策上の目的から、日本の軍政当局によって南方占領地各所の名家の子息が選抜された（広島大学原爆死没者慰霊行事委員会1975）。南方特別留学生は北海道から九州の留学先の学校に在学し学んだ（江上1997）。原爆投下時の広島文理科大学には9名が在学していた（江上1997）。うち8名が被爆し（うち1名は前夜から興南寮を不在にしており8月6日～8月14日までの状況が不明であるため、直接被爆もしくは入市被爆である）（栗原2022）、1名は郊外の病院に入院しており被爆を免れた（江上1997）。在学していた9名のうち2名が被爆後1か月以内に日本で死去した（栗原2022）、（広島大学原爆死没者慰霊行事委員会1975）。被爆後に広島文理科大学で避難生活を過ごした6名全員が19歳から20歳前後の年齢であった（栗原2022）。被爆前までは広島市大手町8丁目元安川の川沿いの土地にあった木造二階建ての興南寮（こうなんりょう）が同留学生らの宿舎に当てられていた（広島大学原爆死没者慰霊行事委員会1975）。

原爆投下時には広島文理科大学に隣接する広島高等師範学校の教室で4名の南方特別留学生が自然科学の講義を受けていた、木造の建物は崩れ、講義をしていた教授には呼びかけても返事がなかった、南方特別留学生たちは落下した物の下をくぐり、窓から校庭にお

り、興南寮へ帰った、火の手がまわり始めた興南寮周辺の倒壊物の中から一般市民および興南寮で被爆した南方特別留学生を救出した。元安川の岸に沿って、勤労働員中に被爆し、大やけどをした若い女学生たちが 30 人くらいおり、南方特別留学生たちは、自らがケガをしていながらも、火から逃れるために彼女たちを筏に乗せて川の中に運んだ、熱気が下火になったのはすでに暗くなってからで、南方特別留学生たちは夜中じゅう、水道管が破裂した場所に通った、乾きと苦痛に泣く女学生のおさえきれない乾きをいやそうとしてバケツを持って何回も往復した、翌朝、完全に火がおさまってから南方特別留学生たちは学校（広島文理科大学）へ帰ることにきめた。その意図は南方特別留学生たちの状態を学校当局へ報告することであった（広島大学原爆死没者慰霊行事委員会編（1975）『生死の火-広島大学原爆被災誌』, pp. 182-341. 広島市編（1971）中の、アリフィン・ベイ「被爆壊滅の思い出」（現文英語・小倉馨訳）『広島市原爆戦災誌一卷第一編総説』広島市, pp. 182-185.（栗原 2022）より筆者が引用し整理したもの）

以下の【表 1】「原爆投下時に広島文理科大学在学中の南方特別留学生 9 名」は（江上 1997）、（永原 2013）、（栗原 2022）、広島大学原爆死没者慰霊行事委員会（1975）、（広島市 1971）をもとに筆者が作成した南方留学生の氏名、出身地などの情報であり、表 2「1945 年 8 月 6 日から 14 日までの広島文理科大学における避難生活者」は（江上 1997）、（栗原 2013）、（広島市 1971）、（栗原 2022）、（藤本 2022）をもとに同じく筆者が作成した 1945 年 8 月 6 日から 14 日までの広島文理科大学における避難生活者を表したものである。

【表 1】 原爆投下時に広島文理科大学在学中の南方特別留学生 9 名

氏名	出身地（当時の名称）	原子爆弾投下時の状況
ニック・ユソフ	マライ	被爆（興南寮近くの路上）（8 月 6 日もしくは 7 日 被爆死）
サイド・オマール	マライ	被爆（興南寮）（9 月 3 日 被爆死）
アブドール・ラザク	マライ	被爆（広島高等師範学校の教室）
アディル・サガラ	スマトラ	被爆（興南寮）
アリフィン・ベイ	スマトラ	被爆（広島高等師範学校の教室）
モハマド・タルミディ	ジャワ	被爆（前夜から興南寮には不在、8 月 6 日～14 日の状況は不明）
ハッサン・ラハヤ	ジャワ	被爆（広島高等師範学校の教室）
フギラン・ユソフ	北ボルネオ	被爆（広島高等師範学校の教室）
ムスカルナ・サストラネガラ	ジャワ	郊外の病院に入院中（場所・病院名不明）退院・合流は 9 月中旬

（江上 1997）、（永原 2013）、（栗原 2022）、（広島大学原爆死没者慰霊行事委員会 1975）、（広島市 1971）を参考に筆者が作成。

【表 2】 1945 年 8 月 6 日から 14 日までの広島文理科大学における避難生活者  
（各参入日、退出日、滞在日数に違いがある）

氏名	所属など	被爆直前までの居住地の住所等
サイド・オマール	南方特別留学生	大手町8丁目11番11 <sup>3</sup> （興南寮）
アブドール・ラザク	〃	〃
アディル・サガラ	〃	〃
アリフィン・ベイ	〃	〃
ハッサン・ラハヤ	〃	〃
フギラン・ユソフ	〃	〃
S 氏 ※	中国選抜留学生	〃
K 氏 ※	〃	〃
高橋明子（後に栗原明子）	広島女学院専門学校 学生	大手町7丁目89番地 <sup>4</sup>
高橋兼子（高橋明子の母）		安佐郡久地村（疎開先）
佐々木千重子（後に中村千重子）	広島女学院専門学校 学生	国泰寺町93番地 <sup>5</sup>
佐々木千賀（佐々木千重子の母）		〃
I 氏 ※	広島市内の勤務先	東観音町〇丁目〇〇番地
M家の家族1 ※	以下、M家の4名は興南寮所有者の家族	大手町〇丁目〇〇番地
M家の家族2 ※		〃
M家の家族3 ※	軍関係の施設に徴用	己斐方面
M家の家族4 ※	広島市内の専門学校 学生	大手町〇丁目〇〇番地

（江上 1997）、（栗原 2013）、（広島市 1971）、（栗原 2022）、（藤本 2022）を参考に筆者が作成。

※ S 氏、K 氏、I 氏、M 家の家族 4 名については原文表記のある江上（1997）から一部をマスキング、イニシャル表記等へ変更した。

### 3. 広島文理科大学建物と原爆被害

#### 3.1 概要

避難先となった建物は、広島市中区東千田町1丁目1番89号に所在する。爆心地からの距離は、1,420メートル。1936年（昭和6年）6月竣工の筋コンクリート造、3階建である。設計者、施工者は、文部省大臣官房建築課、大倉土木となっている（被爆建造物調査委員会 1996）。1949年には学制改革により広島高等師範学校などと共に広島大学に統合され、同年5月から広島大学理学部1号館として使用されることになった（広島文理科大学創立五十周年記念事業会 1980）。広島文理科大学は広島大学の前身校であり、広島大学の文学部、理学部、教育学部の一部の基礎となった（広島大学文書館 2015）。

#### 3.2 被害状況

当時、大学の運動場は食糧増産のために畑地として耕作されていた（広島大学文書館 2015）。被爆当日朝の学校行事予定は平常通りで、集会などはなかった（広島市 1971）。被爆後に本館は外郭を残して全焼した、学生の多くは学徒動員（安芸郡向洋町の日本製鋼所

へ教職員 10 人、学生 150 人）されており（広島市 1971）、（東洋工業へ動員との情報もある）（栗原 2022）、学内での被害は少なかったが、一部理科系の学生と南方特別留学生在が被爆し、1945 年末までに学生、教職員、東南アジアからの留学生など 134 人が死亡した。1945 年 6 月から同大学本館は 3 階部分と 2 階の一部が中国地方総監府に接收されており、中国地方総監府の職員も多数が犠牲になった（被爆建造物調査 1996）広島市は全滅の状態であったことから建物の消火はもちろん死傷者の救護などにもまったく施すべき策がなく、負傷者は各自最寄りの治療所・病院・知人・縁者を求めて避難した（広島大学二十五年史編集委員会 1977）被爆後については、動員出勤中の学生はそのまま動員を継続し、その他の学生は当分休校とし、居所を明らかにし、待機するよう校内へ掲示した（広島市 1971）。翌年の 1946 年 4 月に理科系の学生を広島に復帰させ焼け残りの本館を若干整理して授業を開始した（広島文理科大学創立五十周年記念事業会 1980）

## 4. 方法

### 4.1 説明図版の作成手法

2022 年 4 月 19 日、5 月 26 日に、筆者は栗原明子氏に対面による聞き取り調査を実施した。説明図版の作成手法は以下の順で行われた。

(1) 聞き取り調査の前に、筆者は A3 用紙（キヤノン普通紙ホワイト：SW SA1-A3）に広島文理科大学の説明図版（同大学の西方面上空からの鳥瞰図）を作成した。また栗原明子氏の著書および報道記事等を基に、栗原明子氏の文理科大学における避難生活のエピソードについて一覧表（質問する内容リスト）を作成した。

(2) 聞き取り調査の当日に、説明図版の内容および色合いについて栗原明子氏による目視での確認を経た。

(3) 説明図版を栗原明子氏の目の前のテーブルに置き提示しつつ<sup>6</sup> 筆者が栗原明子氏へ、各エピソードの内容および行われた位置を質問し、栗原明子氏は筆者へ口述回答をしつつ説明図版を指差して位置を教示した。（図版 1）（図版 2）

(4) 栗原明子氏の教示があった部分に筆者が説明文とラフスケッチを描き入れ、位置および内容、ならびにおおよその色合いを確認する作業を行った。

(5) 前述 (3) (4) の作業を、エピソードの数量分、繰り返した。

(6) 後日に説明文を清書し、ラフスケッチの線を濃く描き重ね、確認した色合いを基に彩色した。（清書には鉛筆（三菱 uni HB）を使用、色合いの確認、彩色には色鉛筆（トンボ：1500 CA）を使用）

(7) その後に、栗原明子氏による目視での確認を経て完成とした。完成図は以下の（【図版 3】）である。

【図版 1】

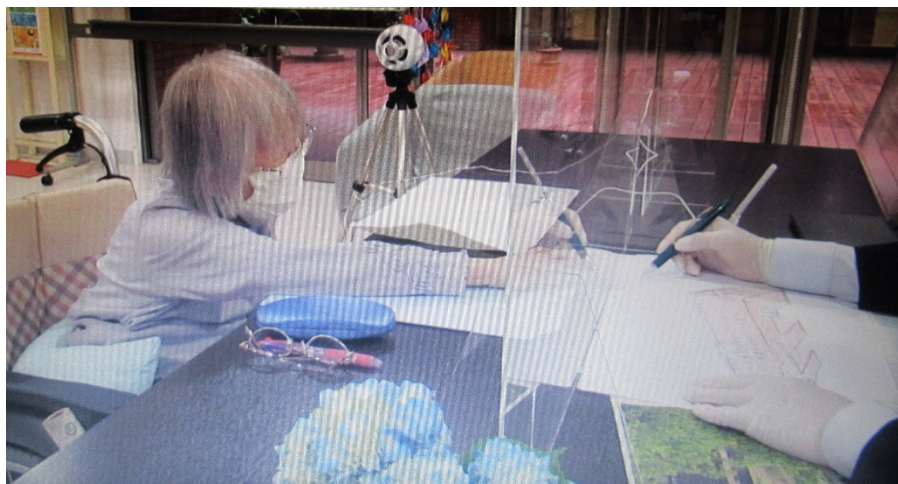


ガラス窓越しで聞き取り調査に対応する栗原明子氏（会話には電話回線を使用し、筆者は屋外にて至近距離



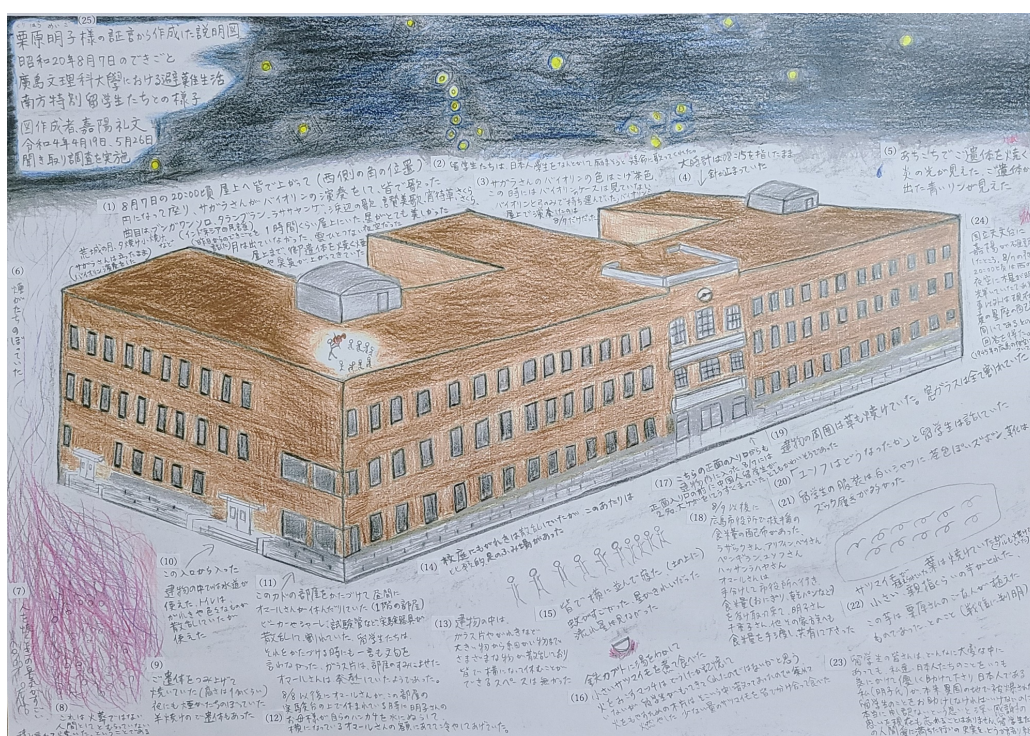
(栗原明子氏から約1メートルの位置)にて聞き取り調査を実施した) 2022年4月19日 撮影:嘉陽礼文

【図版2】



アクリル板越しで聞き取り調査に対応する栗原明子氏(向かって右側が筆者の両手) 2022年5月26日  
撮影:嘉陽礼文

【図版3】



## 4.2 説明図版【図版3】に描き込まれた内容

以下の(1)～(23)は栗原明子氏の証言内容である(栗原2022)。また文中のカッコ内は、栗原明子氏への聞き取り調査時の追加質問で得た内容等の補足事項である。なお、(24)は筆者が大学共同利用機関法人自然科学研究機構国立天文台へ電話による聞き取り調査を行った内容である(大学共同利用機関法人自然科学研究機構国立天文台2022)。次に、(25)は表題である。

(1) 8月7日の20:00頃、屋上へ皆で上がって（西側の角の位置）円になって座り、サガラさんがバイオリンの演奏をして、皆で歌った、曲目はブンガワンソロ、タランブラン、ラササヤンゲ（インドネシア民謡）、浜辺の歌、讃美歌、宵待草、さくらさくら、荒城の月、夕焼け小焼け、等。（サガラさんは立ったままバイオリン演奏をした）（昨日からのできごとを話した）1時間くらい屋上にいた、星がとても美しかった、月は出ていなかった、雲ひとつない夜空だった、屋上まで、御遺体を焼く煙や臭気が上がってきていた。

(2) 留学生たちは、日本人学生をなんとかして励まそうと、懸命に歌ってくれた。

(3) サガラさんのバイオリンの色は焦げ茶色、この時にはバイオリンのケースは見えていない、バイオリンと弓のみで持ち運んでいた、バイオリンを屋上で演奏したのは8/7だけだった。

(4) 大時計は8時15分を指したまま止まっていた。

(5) あちこちでご遺体を焼く炎の光が見えた、ご遺体から出た青いリンが見えた。

(6) 煙がたちのぼっていた。

(7) 人を焼く時の臭気がすごい。

(8) これは火葬ではない、人間としてとむらっていない、積み重ねて焼いた、ということである。

(9) ご遺体を積み上げて焼いていた（高さは1mくらい）、夜にも煙がたちのぼっていた、半焼けのご遺体もあった。

(10) この入口から入った、建物の中では水道が使えた、トイレはがれきや色々なものが散乱していたが使えた。

(11) このカドの部屋を片付けて、昼間にオマールさんが休んだりしていた、（1階の部屋）ピーカーやシャーレや試験管など、実験器具が散乱して割れていた、留学生たちはそれをかたづける時にも一言も文句を言わなかった、ガラス片は部屋のすみによせた、オマールさんは発熱していたようであった。

(12) 8/8以後にオマールさんが、この部屋の実験台の上で休まれている時に明子さんのお母様が自らのハンカチを水にぬらして、横になっているオマールさんの額にあてて冷やしてあげていた。

(13) 建物の中は、ガラス片やがれきなど、大きい物から細かい物までさまざまな物が散乱しており、皆で横になって休むことができるスペースは無かった。

(14) 校庭にもがれきは散乱していたが、このあたりは比較的、足の踏み場があった。

(15) 皆で横に並んで寝た（土の上に）蚊がすごかった、星がきれいだった、流れ星は見なかった。

(16) 鉄カブトに湯をわかして小さいサツマイモを煮て食べた、火をおこすマッチはどうしたか記憶していないが、留学生がもってきてくれたのではないかと思う、火を燃やすための木片はそこいら中に散ってあったので集めて燃やした、少ない量のサツマイモを皆で分け合って食べた。

(17) こちらの正面の入り口からも建物に入った、8/7には正面入り口の前に、中国人留学生が2名、大ケガをしてうずくまっていた。とてもかわいそうであった。

(18) 8/9以降に広島市役所で救援の食料の配布があった、ラザックさん、アリフィン・ベイさん、ペンギラ

ン・ユソフさん、ハッサン・ラハヤさん、オマールさん、は手分けして市役所へ行き、食料（おにぎり、乾パンなど）を受け取って来て、明子さん、千重子さん、他、その家族へも食料を手渡し、共有して下さった。

(19) 建物の周囲は草も焼けていた、窓ガラスは全て割れていた。

(20) 「ユソフはどうなったか」と留学生は話していた。

(21) 留学生の服装は白いシャツに茶色っぽいズボン、靴はズック履きが多かった。

(22) サツマイモが植えられていた、葉は焼けていたが（ソルも焼けていた）小さい、親指くらいの芋がとれた、この芋は栗原さんのご友人が植えたものであったとのこと（戦後に判明）。

(23) 留学生の皆さんは、どんなに大変な中であっても、私達、日本人たちのことをいつも気にかけて優しく助けて下さり、日本人である私（明子氏）が本来、異国の地で被爆された留学生のことをお助けしなければいけないのに、本当に申し訳ないという思いと、深い感謝の思いを現在も忘れることはありません、留学生たちの人間愛に満ちた行いの史実を、どうか語り継いで下さい。

(24) 国立天文台に嘉陽が確認したところ、8/7 の夜 20：00 頃は西の夜空に木星が明るく輝いていたであろう事以外は現在の夏の星座の配置と同じであるとの回答を得た（1945 年の広島の夜空について）。

(25) 栗原明子様の証言から作成した説明図、昭和 20 年 8 月 7 日のできごと、広島文理科大学における避難生活、南方特別留学生たちとの様子、図作成者、嘉陽礼文、令和 4 年 4 月 19 日、5 月 26 日、聞き取り調査を実施。

## 5. おわりに

説明図版（【図版 3】）の作成にあたって、最も重要な情報源は栗原明子氏への聞き取り調査から得られた証言であった。成果として、同証言に基づいた説明図版の作成作業の際に栗原明子氏による目視・指差しの過程を経たことによって、本稿調査時まで不明瞭だった栗原明子氏らの被爆後の広島文理科大学における避難生活の各エピソードの位置関係が説明図版上に特定されたこと、が挙げられる。栗原明子氏は被爆直後の広島文理科大学における避難生活の経験者の中では 2022 年 9 月現在、唯一人の生存者である。今後、栗原明子氏から筆者に頂いた証言の中で説明図版中に反映できていない内容（例、昭和 20 年 8 月 7 日夕刻に広島文理科大学の門の前で偶然に佐々木千重子氏と出会ったこと、同 8 月 7 日夜の時点でも広島文理科大学の北西方面にあった広島高等師範学校附属国民学校の校舎の中にはまだ炎が見えており、建物全体が燃えているように見えたこと等、いずれも今回の聞き取り調査に際し事前に作成した説明図版の用紙サイズが原因で、実施位置を描き込むことができなかった）ならびに今後の聞き取り調査で新たに判明した情報を加えた成果物の作成を目標としたい。本稿を契機として、被爆した南方特別留学生とその関係者についての研究・調査等が発展することを願う、ならびに筆者の調査、研究において説明図版を使用した調査手法による成果物（被爆者、高齢者、の体験を記録する内容のものを中心に）を作成していく所存である。



## 謝辞

本稿作成へ多大な御協力を頂いた栗原明子氏には深甚なる感謝の意を申し上げます。また中村千重子氏の御息女である藤本英利子氏には、御家族の被爆時の住所の確認作業等に御尽力を頂きました。謹んで感謝の意を申し上げます。

## 【註】

1. 栗原明子氏には、証言および聞き取り調査の様子を撮影した写真について掲載許可を頂いた。ならびに本稿に氏名を掲載した人物で、2022年9月現在に御存命の方々については実名掲載の許可を頂いた。
2. 本稿では1945年8月6日から1カ月以内に、原子爆弾の影響によって死亡した人物についての死因を「被爆死」と表現している。
3. (江上 1997) に詳細。現在は跡地近くに『興南寮跡』の石碑が建立されている。
4. (栗原 2013) に詳細。(栗原 2022) にて再確認した番地である。
5. (江上 1997) に詳細。(江上 1997) では本稿とは異なった番地が掲載されている、本稿では(藤本 2022) による番地を掲載した。
6. 新型コロナウイルス感染防止対策として、聞き取り調査の際の面接は、透明なガラス窓越し(筆者は屋外に位置)またはアクリル板越し(屋内)での実施とした。アクリル板越しの調査の際には、栗原明子氏および筆者はマスクを着用した、また筆者はフェイスシールド、エンボス手袋を着用した。

## 【引用文献】

中國新聞 2018 年 3 月 5 日 (朝刊)

中國新聞 2018 年 4 月 16 日 (朝刊)

大学共同利用機関法人自然科学研究機構国立天文台への筆者による聞き取り調査(電話連絡)2022 年 6 月 1 日  
江上芳郎 (1997)『南方特別留学生招聘事業の研究』龍溪書舎, pp. 5-125

藤本英利子氏への、筆者による聞き取り調査(面接)2022 年 7 月 14 日, (電話) 2022 年 8 月 29 日

被爆建造物調査委員会編. 庄野直美監修 (1996)『被爆 50 周年未来への記録ーヒロシマの被爆建造物は語る』  
広島市平和記念資料館, pp. 138-139

広島文理科大学創立五十周年記念事業会編 (1980)『広島文理科大学創立五十周年記念』広島文理科大学創立  
五十周年記念事業会, pp. 42-138

広島大学文書館編 (2015)『広島大学の歴史』広島大学文書館, p. 2

広島大学原爆死没者慰霊行事委員会編 (1975)『生死の火-広島大学原爆被災誌』, pp. 182-341

広島大学二十五年史編集委員会編 (1977)『広島大学二十五年史 包括校史』広島大学, p. 178

広島市編 (1971)『広島市原爆戦災誌一卷第一編総説』広島市, pp. 173-185

広島市編 (1971)『広島原爆戦災誌第四巻第二編各説』広島市, pp. 591-594

川野徳幸, 栗原明子, 今中哲二 (2013)『栗原明子氏オーラル・ヒストリー ある「広島原爆早期入市者」の記録』  
IPSHU 研究報告シリーズ: 研究報告 (48) , pp. 5-28

栗原明子 (2013)『ヒロシマからの祈り』いのちのことば社, pp. 32-40

栗原明子氏への筆者による聞き取り調査(面接)2022 年 4 月 19 日, 2022 年 5 月 26 日, (電話)2022 年 8 月 4 日

永原誠 (2013)『消えた広島 ある一家の体験』ウィンかもがわ, pp. 113-115